

## ジェームズ・デニーの生涯と神学（六）

松浦義夫

### 序論

ジェームズ・デニーの神学的著作三部作の第一の著作である『神学研究』の調査に着手し、第二章をかなり詳細に研究して来たわけであるが、すでに記述したように、この章においては「キリスト論」が主題になっている。「キリスト論」とは、イエス・キリストという歴史上の人物の、人格と働き、すこし表現を変えて言えば、彼が誰であったか、という事柄と、彼が何を為したか、という二方面の事柄を、主題とする、神学の研究分野と言えよう。しかし、ジェームズ・デニーが指摘しているように、イエス・キリストに関しては、その過去が問題になるだけではなく、彼の現在、すなわち、彼が誰であり、何を為しているのか、という点が重要な問題となって来る。

キリスト教というものは、その名からもわかるように、イエス・キリストを、まさにその中心に置いている。したがって、「キリスト論」が、このイエス・キリスト探求に集中している研究であるとするならば、「キリスト論」は、キリスト教神学の一研究分野と言えよう。その中心的主題と言う方が、より妥当と言えよう。「キリスト論」の開始を、イエス自身の生前の時期に属する、という見解も、不可能ではない。『マルコによる福音書』第八章二七節の記事によると、イエスは、弟子たちに対して、「人々は、わたしをだれと言っているか」と尋ねている。このことは、人々の間に、このナザレ出身の教師は、いったい何者なのか、洗礼者ヨハネの再来か、エリヤか、それとも、過去の預言者が再来したのか、というような憶測が、すでに存在したことを暗示している。しかし、イエスは、

その質問にすぐに続けて、直接的に弟子に向けて、別の質問をしている。「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。弟子たちは、この主題に関して、何か漠然とした見解を持っていたかもしれない民衆の中の、単なる一員ではなく、少なくとも、何らかの接触を、イエスに対して持っていたのであるし、弟子と人々からは看做されていた人々である。ペテロが、個人的にせよ、弟子の代表としてにせよ、「あなたこそキリストです」と答える。福音書記者マルコが、この出来事を、イエス自身の生前の宣教期間中に、設定しているのが、はたして正しいかどうかはさておき、あるいは、イエスの復活後に、弟子たちが彼に対する信仰を持つに至った後の出来事を、イエスの生前の出来事として、遡って設定しているという可能性も考慮するとしても、初めは、漠然とした型にせよ、弟子たちが、自分たちの師に対して、なしていた評価が、より定式化された告白の型を採るようになった時期があったはずである。この時を「キリスト論」の、あるいはまた「キリスト教」自体の開始の時と呼ぶことが可能であろう。したがって、我々も、パウロ・テリッヒとともに、「キリスト教の誕生は、『イエス』という名の人物の誕生によってではなく、彼の弟子たちの一人

が、彼に対して『あなたこそキリストです』と告白するように促されて、その告白を始めて為した時に起こった」<sup>註二</sup>というように言うことも、「可能と言えるわけである。もちろん、この「キリスト」という用語は、イエスに対して付けられた「称号」のうちの一つであり、当時においても、今日におけると同様に、この用語で意味されている事柄は、一様ではない。『マルコによる福音書』において、一般民衆の抱いていた、イエスに対する漠然とした見解と、ペテロのキリスト告白は、かなり明確に区別できるものとして表現されているようにも思えるが、この区別を、絶対視してはならないであろう。なぜなら、一般の民衆の抱いていた漠然とした見解も、この「キリスト」という「称号」も、ともに、イエス自身も、弟子たちも、一般民衆も共通に属していた、ユダヤ教という宗教的世界において使用されていた用語であり、用法であるからである。イエスという歴史上の人物に接し、その人物を、自分たちの生きている状況の中で受けとめ、評価し、表現する。その際、彼らの表現手段として、使用できるものは、このような「称号」であったわけであり、もちろん、一人の人物を表現するのに、「称号」のみで表現しつくすことは不可能であろう。また、状況が変化

するにしたがって、表現方法も変化させざるをえない、ということも言えよう。こういう点にこそ、「キリスト論」の持つ問題点があると言えるわけである。しかし、ここで我々が考慮しなければならないのは、人間のことばの持つ限界というものである。一人の人物を伝えるのに、我々はことばで伝えるという以外に、伝達手段を持たないとしたら、ことばの持つ限界を認識しつつも、なんとか伝達するように最大限の努力をするか、それとも、一人の人物の極一面のみしか伝達できないのだから、初めから伝達を不可能事として諦めるか、のいずれかしか道はないであろう。このような、様々な限界ないし制約の中にあつて、『新約聖書』の著者たちまた、それに先立つ、伝承の担い手たちは、いわば不可能事を可能にするように、あえて一步を歩み出したのである。

ところで、ジェームズ・デニーは、このような、弟子たちの信仰告白を、生前のイエスの自己理解と連続するものと見ているわけである。しかし、イエス自身の自己理解と言っても、イエス自身が、自己をどのよう理解していたかを、弟子たちに、言葉と行為で示さなかつたとしたら、当然弟子たちも推測する以外にないであろうと考えられる。そうすると、イエス自身

の、史実としての言葉と行為が、重大な問題となつてくるわけである。しかし、たとえわれわれが、聖書からイエス自身の史実としての言葉と行為を抽出することができたとしても、それ自体、「あなたこそキリストです」と告白した弟子たち、またこの弟子たちに続く、初代教会の人々、特に『新約聖書』の著者たちによって選択されたものであつて、イエスの他の言葉や行為には触れられていないわけである。したがつて、われわれは、この弟子たちや初代教会の人々の選択した解釈を通して、イエス自身に近づくしか方法はないわけである。しかもその上、直接に史実であると考えられる可能性の高いイエスの数少ない言葉や行為は、教会という文脈の中で、『新約聖書』特に『福音書』の中に書き留められた。しかし、ほとんどの場合に、われわれは、イエスが語つたり行動したりした特定の文脈を再構成することはきわめて困難なことである。イエスのこの言葉あの言葉が語られた状況の文脈なしには、さまざまな解釈が可能であつて、本当の意味で、ジェームズ・デニーの理解するところの、イエス自身の自己理解を決定することができない。

このような困難な問題、しかも「キリスト論」という神学の中心的主題を考えるにあつて、次に引用す

る、現代オランダの神学者E・スヒレベーク (Edward Schillebeeckx) の指摘は、ジェームズ・デニーの神学を調査するに際しても、まことに示唆に富むものといえよう。<sup>注(1)</sup>

「一人の人は広い領域の焦点となる。従って『ナザレのイエスは誰なのか?』という問いは、彼以前と以後の歴史上の出来事との係わりなく提起され得ない。どんな人も、(a)彼を取り巻いていた、すなわち、彼の支えとなり、また彼が直面し彼に批判的な反応を起させた出来事の過程と無関係に、(b)彼の周囲の人々、すなわち、彼から受け取って逆に彼に影響を与え、独自の反応を起させた同時代の人々との係わりと無関係に、(c)後の歴史に彼が及ぼした影響あるいは彼自身の直接行動によって彼が推進しようとしていたであろうものと無関係には理解できない。換言すると、一人の人間は、過去、未来、そして他でもないその人の現在との連続的相互関係の中心なのである。

このことは、イエスについても全く同様に適用できる。それこそ、あらゆる類のキリスト論あるいはイエスに関するキリスト教的解釈の出発点が、単なるナザレのイエスではないこと、まして教会のケリユグマまたは信経ではないことの理由である。出発点はむしろ、

イエス自身が、この一世紀の最初に始めた運動である。ゆえに、われわれにとつて最も正当な出発点は歴史上の事実である。またそれは福音が示すように、一人の人間が、一握りの人々の人生にとつて何を意味することになったのか、ということなのである。換言すると、出発点は、イエス自身と彼の言行の反映としての、最初のキリスト教共同体である。イエスの救いの提供に対し、一部のユダヤ人は無条件にそれを受け入れた。その提供の内容が何であったのかということ、われわれは新約聖書に記録された反応と他の証しによって、ただ間接的に推論し得る。すなわち、初期のキリスト教共同体のキリスト論的応答というプリズムを通して、である。このように彼らは、『信仰という言葉』を通してナザレのイエスを伝えている。しかしそうしながらも、信仰を喚起させた現実のナザレのイエス、具体的歴史的事実を語っているのである」。

やや長いが全文を引用した。この神学者も指摘しているように、『新約聖書』に記されている、イエスの言葉や行為は、それがたとえ、弟子たちの信仰というプリズムを通して描かれているとしても、イエス自身の自己理解の反映として、批判的に観察することにより、イエス自身に近づくための、有力な材料を提供し

てくれているということである。

## 第一章 人の子

すでに、われわれはジェームズ・デニーの著作によつて、「人の子」という「称号」に関して調査して来ているわけであるが、ここでもう一度、この「人の子」に関する問題を整理してみることにする。

「人の子」というのは、第一に「称号」であるのかどうか、という点からすでに問題となる。また、イエス自身、この用語を自分自身を指すものとして使用したのか、それともイエスは、自分以外の何者か、自分の後に来て、新しい時代を開く働きをする、イエス自身期待していた何者かを指すものとして使用したのだろうか、あるいは、そもそもこの「人の子」という用語は、イエス自身の口から出た表現なのか、それとも、後の教団が、生前のイエスの発言として、遡って、イエス自身に語らせているのか、というようなことも問題となる。しかし、われわれにとっては、先述のストレーベークの指摘のように、後の教団の手による、『新約聖書』によつてしか、イエス自身に近づくことはできないわけであり、たとえ、後の教団が生前のイエスの発言として、溯ってイエス自身に語らせている

としても、生前のイエス自身に語らせるだけの根拠があるものであるとしたら、イエス自身の自己理解を解明する、有力な手掛かりとなることは否定する必要はなからう。

ところで、ジェームズ・デニーが、イエス自身の自己理解を解明しようとする時、すなわち、現今の問題としては、彼の『神学研究』の第二章を記述する際、彼が、特に「神の子」と「人の子」という、二つの「称号」を手掛かりとするのは、どういう理由によるものなのか、一つは、今も述べたように、イエス自身の口を通して発言させるだけの根拠を、後の教団が、生前のイエス自身の存在に見出した結果が、「人の子」発言にあらわれているからであろう。では、「神の子」の場合は、どうなるのだろうか。すでにわれわれが調査したところによると、ジェームズ・デニーが、この「神の子」という「称号」を扱う際には、イエス自身が、自己を「神の子」と呼ぶというより、むしろ、神を「父」と呼んでいることから、その「父」の「子」としての意味で、自己を「子」と呼んでいる点に注目し、ここに、イエス自身の「神の子」としての自己理解を見出そうとしているわけである。ところで、この「子」という用語も「人の子」という用語も、『新約聖

『福音書』の中では、『福音書』においての使用例が、圧倒的に多く、しかもイエス自身の発言の中に使用されているのが、ほとんどといってもよい程である。ジェームズ・デニーは、おそらく、この客観的事実に着目し、この「子」と「人の子」という二つの用語を、直接に生前のイエスに遡りうる可能性のある言葉 *verba ipsius* *similia* として想定し、そこにイエス自身の自己理解解明の手掛かりを見出そうと企てているのだらう、というように考えられる。したがって、ジェームズ・デニーによると、「人の子」は、イエス自身にとっては、自分以外の何者かを指す用語ではなく、自分自身を指す用語として使用している、という理解が前提となっているわけである。しかし、先述のように、この「人の子」という「称号」は、多くの問題を抱えているので、そう単純に、ジェームズ・デニーの説に賛成するわけにはいかない。したがって、E・S・ヒレベークも述べているように、イエス自身にせよ、弟子たちにせよ、ユダヤ教という宗教的世界に生きた人々であるからには、このユダヤ教という枠内において発言しているわけであるから、この「人の子」という「称号」が、『福音書』において、イエス自身の口から発せられた

か、ということ、すなわち、いわば「人の子」の歴史という点を、考慮しておく必要があるらう。もちろん、これは『新約聖書』全体に対しても言い得ることだが、たとえユダヤ教の枠内において発言しているとしても、一旦イエスの口なり、弟子の口を通して発言されると、すでにその時点から、この枠を超えているということである。もし、イエスにせよ弟子たちにせよ、この枠を超え出ることがなかったなら、当時のユダヤ教徒たち、別の表現で言えば、ごく少数の例外的存在である、イエスの囲りに集まった人々以外の、大多数の一般民衆も含めた人々によって、イエスも弟子たちも拒否されたことの理由が説明がつかない。すなわち、『新約聖書』は、イエスという一人の歴史的存在において、『旧約聖書』を継承することにおいて、超え出ているということである。このことは、今問題となっている「人の子」という「称号」に対しても言い得ることである。ジェームズ・デニーは、特に『ダニエル書』における「人の子」の用法に集中して、自らの主張をしているわけであるが、我々としては、もう少し丁寧に「人の子」という「称号」の前史を見いくことにする。

まず出発点として、多数の学者が一致して、し

かも重要であると思われる理解は、この「人の子」はヘブライ語ではベン・アダム、アラム語ではバル・ナシアであるが、一般的には、「人間」を意味する時の迂言的な表現として使用された、ということである。

例として、『詩篇』第八篇四節を引用すると、「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」、という表現からも理解できるように、「人」と「人の子」が対句法によって、同義語として使用されており、両者とも、「人間」という意味に使用されている。これが、いわば日常的用法である。おそらく、イエスが「人の子」を使用したのは、「理想的人間」という意味であろうとするような、近代の著作家たちに見られる説は、この日常的用法に注目したのかも知れない。すでに述べたように、ジェームズ・デニーは、この説は退けている。『旧約聖書』で、「人の子」という表現が使用されている、特定の個所に今まで多くの注目を集めて来ているが、それは、ジェームズ・デニーも採り上げている、『ダニエル書』の中の、ダニエルが見たといわれる幻の個所である。そこには、次のように記されている。「見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導か

れた。彼に主権と光榮と國とを賜い、諸民、諸族、諸國語の者を彼に任せさせた。その主権は永遠の主権であつて、なくなることがなく、その國は滅びることがない」(『ダニエル書』七・一三—一四)。よくなされている主張は、次のようなものである。すなわち、この個所で、「人の子」は、黙示文学的表象であり、これによって示される人物は、新しい時代、新しい世界をもたらし、彼自身、その時代において、君臨するというものである。この個所において、イエス・キリストの來たるべき高擧の預言を読み取るう、ということまで企てる者もあるが、かなり無理があろう。『ダニエル書』自体の「人の子」で示されているのは、やはりジェームズ・デニーの主張しているように、「人の子は、新しい、全世界的な、永遠の統治、王国における、主権者であり、彼の王国においては、真に人間的な事柄のみが支配しているのだということを、暗に示そうとしたのであり」、イエスの口を通じて発言された時に、イエスの言葉と行為において、今ここで新しい時代、すなわち「神の國」が始まっているのであり、イエスの自己理解としては、「人の子」である自己において、自己を通して、神の王的支配が開始されたことを宣言したものと理解すべきであらう。

「人の子」が、イエスの時代には、一般的に「人間」を示す用語であった、ということはずでに述べたが、イエスが、この「人の子」を自らに適用することによって、真に人間的な支配というものが、どういう状態であるのかを、自らの言葉と行為で示したといえよう。この点に関して、ジェームズ・デニーは、次のように述べている。<sup>注③</sup>

「この人の子というまさにその姿において、支配権という事柄に対する、一般的な考え方を、真実で、永遠にわたって適応されるべき考え方を示すことにより、根元から、問いなおすということが、イエスの職務の中でも、重要な部分を占めている。彼は野望を抱いていた弟子たちに対してこう語った。『君たちが知っているように、国を支配する者と人々から見做されている者たちは、ただそのように見做されているというだけにすぎない。というのは、彼らが行使しているのは、真の支配権ではないのだから。国を支配する者と人々から見做されている者たちは、人々の上に君臨しており、その中の偉大な者と見做されている者たちも、人々を、好きかってに扱っているにすぎない。しかし、君たちの間では、そうあってはならない。だれでも、偉大でありたい、すなわち支配者となりたいと思うもの

は、君たちの間では、君たちの召使いとならなければならぬ。君たちの間で、第一の者となりたい、すなわち、実際の主権者となりたいと思うものは、君たちの奴隷とならなければならない。』なぜならば、『人の子』すなわち、永遠の世界的支配の主導者でありまた創設者である、そして、その者において、真の人間性が支配権を確立する、その『人の子』が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるために、そして自らの生命を、多くの者のための犠牲として与えるためであるのだから。したがって、『人の子』という名称が表現しようとしているのは、単に我々との近さ、人間の兄弟としての優しさと共感だけではなく、我々人類の唯一の真実の王としての、必須の徴であり属性である、近さ、兄弟としての優しさ、共感、さらに奉仕の生活、犠牲としての死である。暴力と利己主義に充ちた、獣の王国は過ぎ去り、神の国が来る。そこにおいては、支配権は、イエスの精神において実行され、国民を、真の人間の性質において奮いたたせる」。

「人の子」と「神の子」という両称号は、ある意味において、たがいに一致する点がある。「神の子」は、神との特別な関係を示すのに役立つ、「人の子」は、我々人類との特別な関係を示すのに役立つ。我々は

「人の子」であり、また「神の子」の一員であるかもしれぬ。しかし、イエスは、唯一の「人の子」であると同時に、唯一の「神の子」なのである。というのが、イエス自身にせよ、後の教会の解釈にせよ、イエスの自己理解として、『福音書』には記述されている。「神の子」は、神との完全な一致を示し、「人の子」は我々人類との完全な一致を示す、というように、ジェームズ・デニーは理解する。さらに彼は、「神の子」との関連で、「人の子」について、次のように記述している。<sup>注四</sup>

「キリストが、自己を神の子と呼ぶ時、彼は、神に對して、また神の世界における働きにとって、他のいかなる存在も、なし得ずありえない関係にあることを意味している。そして、彼が自己を人の子と呼ぶ時、彼は、我々人類に對して、また、我々人類の希望にとつて、他のいかなる存在も、なし得ずありえない関係にあることを意味している。彼は、我々の実際の生活において、我々に与する。彼は、我々のものをすべて、それが苦難であれ、病であれ、恥であれ、負い目であれ、罪と死であれ、すべて、自身のものとしてひきうけ、また、自らの問題として、感じとる。しかし、彼は、それと同時に、我々打ちひしがれた仲間に對して、

勝利をもたらす者、我々を打ち負かす、すべてのものを、打ち負かすことのできる、主権者であり、彼自身の大勝利に、我々を参与させる者である。このことのゆえに、キリストが我々人類のために為すこと、特に解放と救済において、この人の子という称号が関連づけられていると言えよう」。

このこと、すなわち解放と救済との関連で、「人の子」が使用されている例として、ジェームズ・デニーは、四つの聖句を引用している。<sup>注五</sup> 「人の子が来たのは、失われたものを捜し求めて救うためである」。

「人の子が来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためであり、自らの生命を多くの人のための犠牲として与えるためである」。「人の子は、安息日の主である」。したがって、この規定の実行方法は、人類にとつて恵みとなり、重荷とならないように見做す権利が、自分にはある。「人の子は、地上で罪を赦す権威がある」。したがって、良心の重荷をとき放ち、奴隸状態にある意志を自由にし、身体に不自由がある者を、再度自由な人間にすることができぬ。

「人の子」によって示される、イエス自身の自己理解は、したがって、我々人類との連帯を示すとともに、我々に対する、解放と救済の主権者としての自己の表

明でもあるわけである。このような自己理解からは、当然の帰結として、「人の子」を、自分以外の存在として理解する余地はない。したがって、ジェームズ・デニーの主張によると、イエスが「人の子」と呼ぶ時は、自分自身を指し示すのであって、イエス以外の存在を指し示してはいないことになる。我々としては、イエス自身の内面を伺う術はないのであるが、少なくとも、後の教会は、この「人の子」という称号で、イエス自身のこととして理解したのであり、他の存在のことと理解したのではないということだけは、言えよう。

## 第二章 イエスの無罪性

「人の子」において、我々が調査したことから言えるのは、イエスが、全ての点において、我々の存在のあり方を、自らのものとしてひきうけた、という理解であった。しかし、ここで忘れてはならないのは、この徹頭徹尾我々と運命を共にし、我々に共感しつつも、イエスと我々人類の間には、けっして超えることのできない、隔たりが存在するということである。この隔たりを、イエスの方から、我々の側に向って、超えて来た、というのが『福音書』の主張であるが、それ

もやはり、イエス自身、この大きな隔たりを自覚していたであろうことは、『福音書』のあちらこちらに見出すことができる。イエス以前の神からの使者は、下僕にすぎないが、彼自身は、神の愛する独り子である。他の人々は、道に迷った羊たちにすぎないが、彼は羊たちのために生命を賭ける良き羊飼いである。他の人々は病に打ちひしがれた者、彼は癒しのためにやって来た医者である。他の人々は、罪の重荷に耐えかねている存在であり、彼は、自らの血を犠牲として献げ、罪を取りのぞくことのできる存在である。これらのことを、後の教会は、「イエスの無罪性」というように表現した。他の全ての点で、我々と性質を同じくするイエスが、唯一我々と異なる点、彼は我々のような「罪人」ではなかった、という主張、このイエスと我々との隔たりを、たしかに、『新約聖書』以後の教会は、根元的要素の一つとして理解して来た。しかし、はたして、このことが、イエス自身の自己理解に遡ることができるのであるか、という点が、ジェームズ・デニーが次に採り上げる、「キリスト論」の重要な問題である。

このイエスの「無罪性」に対して、ジェームズ・デニーは、次のように記述している。<sup>註六</sup>「この事、す

なわち、イエスの無罪性という事柄は、彼の性質の完全性と、彼の持つ共感性にもかかわらず、イエスと他のすべての者の間に存在する、區別を主張する。彼は、ただ一つの点で、我々すべてがそうである点で我々と違っていた。彼は、罪人ではなかった。彼が罪人ではないというのは、彼の自己意識の一部であった。彼が他者に対して問責する時、いやむしろ、彼を問責できるならしてみろと他者にいどむ時、自分自身を罪ありと認めているとしたら、彼は何と不誠実であったことか。……この罪人たちとの隔たり、という事柄は、些

細な事ではなく、きわめて重大な事なのである。これこそが、贖罪の前提条件と言えるのである。この性質なくして、キリストは、救済者としての資格が与えられない。もしこの性質がなければ、我々と同様救われなければならない存在なのである。この教義以上に、護教論的興味と価値を持った教義はほとんどない、と言えよう。一旦心の中に、そして開かれた偏見のない心の持主なら受け入れられる性質のものであるが、このイエスが、自身の自己理解において、人々の中で孤立して存在しており、自分一人、全世界を覆っている病に犯されず、自分一人、良心の重荷に打ちひしがれず、自分一人、はちきれんばかりの強い意志を具えて

いるという印象が築き上げられると、完全なキリスト教信仰への、偉大な第一歩が、踏み出されたことになる。精神の奇跡が認められたことになり、人間の生涯と歴史の進路に対しての、新しい開始が告げられたこととなる」。

ジェームズ・デニーのこのような主張は、もちろん、『福音書』に描かれた、イエスの姿から受ける、「印象」ということであり、イエス自身の自己理解に遡ると言い得るか、という点では、たしかに疑問な点も無いとは言えないけれども、少なくとも、弟子たち、また後の教会の解釈においては、贖罪者、救済者としてのイエスにとつての、大前提とも言える事柄である。罪人が罪人を裁いたり、ましてや罪人を赦したりできるのか、という「キリスト論」がそもそも成立しうるかどうかの根本的問題なのである。しかし、イエス自身、罪の赦しを宣言していることから、また、おそらく、この点において、当時のユダヤ教当局の大反撥を買ったことを考慮すると、やはり、ジェームズ・デニーの主張するように、イエス自身の自己理解において、自らの「無罪性」と言い得る概念が存在していたと、推測することも可能といえよう。

ジェームズ・デニーは『神学研究』の第二章におい

て、イエス自身の自己理解としての「キリスト論」を扱いながら、「審判者」としてのイエスを記述することにより、この章を終え、第三章において、イエスの自己理解を受容しつつ、後の教会、特に伝承の担い手たちが、自らの「キリスト論」を、どのように展開させていったかの記述に進む。このイエスの自己理解の最後の問題としての、「審判者」としてのイエスの性格と、後の教会の「キリスト論」に関しては、紙面の制約上、稿をあらためて議論を進めることとする。

(以下次号に続く)

- 注 (一) Tillich, P. *Systematic Theology*, vol. 2, P97  
(二) Eスヒレンク著『イエス』第一巻 三八頁。  
(三) Denney, J. *Studies in Theology*. London, 1904 P37  
(四) *Ibid.*, P39  
(五) *Ibid.*, P39  
(六) *Ibid.*, P40